漆の食卓

～会津伝統技法による提案～

a2200925 三留朋江

■研究概要

会津塗の伝統技法「鉄錆塗」と「朱磨き」について更なる表現の可能性を求め研究を行う。さらにその技法を活かし、現代の生活の中になじむようなデザインの漆器を制作する。

■背景と目的

会津漆器は蒲生氏郷入部の折、京都から職人を多数迎え会津に技術が定着した事から発展し、現在の会津漆器へと繋がりをみせている。戊辰戦争後、一時は衰退しかけたが職人や商人たちによって復興を遂げ、それ以降職人たちが知恵をこらし新たな技法が増え、会津漆器は栄えていった。しかしながら、今では地場産業の衰退化、後継者不足などの問題が伝統的工芸の盛衰に大きな影響を与えている。そして、高価格な漆器は時代とともに私たちの生活の中から消え去ろうともしている。そういった視点から、失われようとしている会津特有の装飾技法を用いて、漆の美しさを引き立てながらも現代の食文化に対応した漆器を提案したい。現在、主に制作されている漆器は、お盆、お椀、重箱といった器が多いが、時代は変わり生活様式も変化し続ける中で漆器の形態も変わっていく必要がある。また、取り上げる技法の鉄錆塗と朱磨きは会津で生まれた独自の装飾技法であるにもかかわらず、描かれるデザインが決まりきったものが多い。そこで、新たなデザインの提案として、現代を感じさせるものを取り入れることによって、新しい漆器が生まれるのではないかと考え卒業研究の制作にあたった。現代の食文化に対応した新しい漆器を制作し、使ってもらうことで、消費社会の中で忘れさられた、ひとつの物を大切に使うという日本人の心も思い出してもらいたい。

■デザインについて

・家庭でよく活用されるよう、深めの皿を制作。皿に合わせスプーン、フォークを制作。
・技法…乾漆技法 (皿)、鉄錆塗、朱磨き
・使用する素材…麻布、木、漆

■制作工程

1. デザイン検討
2. 原型の型を制作 (粘土、石膏を使用)
3. 離型剤をつける
4. 下地付け (4 回)
5. 布着せ
6. 目摺り
(5・6 を 5 回繰り返す)
7. 下地付け (4 回)
8. 型を外す
原型完成

～内側～
9. 縁を切断
10. 追い錆 (縁)
11. 捨て塗り (2 回)
12. 追い錆 (全体)
13. 下塗り
14. 中塗り
15. 上塗り
16. 加飾　17. 胴摺り、磨き

～外側～
9. 高台を付ける
10. 捨て塗り
11. 下塗り
12. 中塗り
13. 上塗り

～スプーン・フォーク～
1. 原型制作
2. 研磨
3. かため (2 回)
4. 摺り (8 回)
5. 加飾
6. 磨き

原型制作

下地付け

高台付け

捨て塗り

追い錆

上塗り

摺り

朱磨き実験

鉄錆実験

■考察・感想

家庭でよく使用される、使いやすくて応用のきくデザインにしたかったので、深さのあるスープ・パスタ皿をメインに制作した。制作方法は自分の思い描く形に表現するために、同じ形で複数生産可能な乾漆技法を選んだ。粘土を用いて形を作る段階で、ひき篦を使うのだが、轆轤のように正確な形にならず、多少の歪みで塗りの作業が難航した。鉄錆塗と朱磨きの実験を行ってみて、想像以上に様々な表現が可能だったので面白かった。それぞれのコツをつかむのに少し時間がかかったが、出来上がりを楽しみにしながら制作できた。家族や大切な人たちと漆器を使って楽しい食卓を囲んでいる風景をイメージして制作に取り組んだ。

市場に出回っている漆器は大量生産を考慮するが故に、従来の形態から新たなデザインに転換することは難しいかもしれないが、時代のニーズを考慮し、思い切った提案をすることも伝統的工芸を存続させていくためには重要であるのではないかと思われた。

2 年間漆について学び、ひとつのものを作るのにはとても手間のかかることがわかった。しかし、その手間がわかるからこそ、ものを大切にしようと思えるようになった。また、漆を通じてほかの工芸に関心を向けるようになったので、自分の視野が大きく開けた。短大で学んだ貴重な体験を今後も大切にしていきたい。